二〇一二年二月二五日

観梅や足下にひかる茅渟の海　宏虎
高階の窓に端山の遠霞　わかば
失せものの見つかりてより温かし　満天
笑ひ顔はた泣き顔か紙雛　よし子
梅東風にからからと鳴るしゃもじ絵馬　菜々
軒樋の中より翔てり恋雀　よし女
行厨は港が見ゆる梅の丘　菜々

二〇一二年二月二四日

雛壇に十二の干支も勢揃ひ　よし女
洗ひ物ぱんぱん叩き春日和　あさこ
盆梅の白一輪の香りかな　わかば
温かき散歩日和となりにけり　ひかり
堰落つるたびに奏でる春の川　菜々
春夕焼け一番星を見つけたり　あおい
一燭にゆらぐ秘仏の朧かな　よし子
湖岸道はるかに雪の比良嶺見ゆ　雅流
自転車のペダルも軽き春日和　満天
病院の検査を待てる椅子寒し　百合

二〇一二年二月二三日

居酒屋の人気メニューは蕗の薹　宏虎
下萌えの林道深き轍あり　うつぎ
セーターの腕を巻き上げ採血す　あさこ
瀟洒なる屋敷町ぬけ梅探る　せいじ
積ん読はわたしの美学春ほこり　きづな
すれ違ふ人皆会釈梅日和　こすもす
梅の丘偕老組もちらほらと　ひかり

二〇一二年二月二二日

婚礼の風船春の空高く　あおい
観世音像立ちませる雪間かな　三刀
退院を謝し寄る宮に百千鳥　小袖
春炬燵大歳時記を座右とし　雅流
雛の部屋柱に古き掛時計　うつぎ
手作りのお手玉もまた雛調度　有香
クッキーを焼く母と子の春の昼　あおい
山襞の影の蒼さや春隣　とろうち

二〇一二年二月二一日

クラクション鳴らし着きいは雛の客　なつき
玉椿色様々に咲く館　わかば
打ち寄せる波に春光弾けけり　あおい
盛り上がる句談議に笑む雛かな　うつぎ
とどきたる訃報に今朝の春の冷え　とろうち
春光に金の鯱反りにけり　ぽんこ
行厨は梅の丘なる四阿に　はく子
餌をまくや忽ち喧噪鴨の池　なつき
春燈に迎えられたる旅の宿　あおい
パンジーに笑みのもどりし朝十時　英子

二〇一二年二月二〇日

店頭の最前線はシクラメン　満天
球春の便りを数え待つ日かな　花茗荷
春夕焼西方浄土思ひけり　はく子
深雪積むまたも商店一つ失せ　あさこ
薄氷の虜となりし柄杓かな　きづな
冴返る一日一句休むわけにゆかず　うつぎ
白き腹雪に紛れし石叩き　菜々
一徹の父の手植えの梅白し

二〇一二年二月一九日

天を突くメタセコイアに風花す　きづな
チェンソーの音がこだます斑雪山　雅流
さきほどの雪嘘のごと夕映えて　せいじ
野路往くは朝帰りらし猫の夫　よし女
下萌をスキップでくる女の子　宏虎
と見る間に雪雲空を蔽ひけり　せいじ
鴨の嘴よりこぼれゐる春の水　とろうち

毎日句会みのる選・二〇一二年二月二八日